

## 自記式質問票の乱用？

宮岡 等

最近、学会や研究会で自記式質問票を用いたいくつかの研究報告に接する機会があった。どうも気になることが多い。第一に、「自記式質問票でX点以上だから精神面の不調がある」と主張するが、質問票を用いた状況を考えないと、精神面の不調を過度に、あるいは誤って評価する可能性が高い。たとえば震災後の調査ではX点以上が多いという結果が出ても、軽度の不安や抑うつが増悪は精神面の健康な反応であって、情動面で何も変化を示さない人より健康度が高いともいえる。また「質問票で陽性をどう意味づけるか」と質問しても、「精神面に不調がある」程度の答えしか返せない研究者がいた。多くの質問票は本来スクリーニングに用いられ、診断を明確にするには二次検査が必要である。また質問票の目的が、「精神面の不調者」や「メンタル不調者」の抽出などという曖昧なものであるはずはなく、うつ病や神経症のスクリーニング、あるいは不安や抑うつへの重症度評価などへの有用性が検証されているはずである。

第二に、何らかの問題がある人を見つけるのが目的なら、その質問票で見出した後、「どのような対応ができるか」を考えてから研究を始めてほしい。何を抽出しているかが曖昧であれば、対応など考えようもないし、抽出対象が明確であっても対応のしようがまったくないのであれば、対象者に負担の大きい研究を実施するのは適切でない。問題があれば「カウンセリングを行う」とか「専門家に紹介する」だけでは、あまりに説得力がない。

自記式質問票を用いて結果が数値で現れると「何らかの研究成果が出た」と誤解されやすいが、本来に意義ある研究は多くない。また、企業への講演派遣や書物・DVD販売などを行うメンタルヘルス企業がかかわると、収益を上げるために「問題あり群」を増やそうとしているのではないかと疑いたくなることもある。研究者はひとりよがりな研究に走らず、適切な知識と倫理をもつ必要がある。

